

2014 年度 前期

## 授業改善アンケート調査結果

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科



# 授業改善アンケート調査結果

## 1. 授業改善アンケートの概要

人間科学研究科では、2004年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケートを実施している。今回の2014年度前期より実施方式を大幅に改訂し、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式から、授業内でマークシート用紙を配布・回収する方式に変更した。実施期間は以下の通りである。

2014年度前期アンケート回答期間：2014年7月16日～8月5日

(集中講義 A)：2014年8月5日～8月8日

(集中講義 B)：2014年9月1日～9月5日

(集中講義 C)：2014年9月8日～9月12日

(集中講義 D)：2014年9月16日～9月19日

対象科目は、人間科学部・人間科学研究科で実施されている講義科目である。対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は70.1%であった。

**2014年度前期授業改善アンケート 対象科目数・回答数**

		対象 科目数	回答数
共通科目		9	74
学部科目	行動系科目	14	515
	社会系科目	16	441
	教育系科目	15	508
	グローバル系科目	14	186
大学院科目		49	295
計		117	2019

回収数 2019 / 受講登録者数 2879 = 回収率 70.1%

※1「人間科学概論」等の基礎科目は、行動・社会・教育・グローバル系科目に割り振られている。

2 受講登録者数は、アンケートが実施された科目についての数値である。

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされている。さらに2010年度後期より、授業担当教員からアンケート結果を踏まえて授業の振り返りのコメントの提出を求めており、次回の授業の改善に役立てられている。

## 2. 授業改善アンケートの結果

今回の2014年度前期の授業改善アンケートは、Web方式からマークシート方式へとアンケート方式の変更により、回収率が24.3%（2013年度後期）から70.1%へと大幅に上昇した。

主要な質問項目である、授業の満足度についての問10「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」については、2013年度後期の3.87から2014年度前期の3.96へと改善がみられた（1～5の範囲で数値が高いほど高評価を意味する）。もちろん、アンケート方式を大きく変更したため、前回までのアンケート結果と比較することは難しい。よって、この満足度の上昇傾向が確かなものかを、今後アンケートを繰り返す中で見極めていくことが必要である。

満足度に関する問10以外の質問項目では、マークシート方式への変更に伴って、質問文や回答選択肢のワーディングが微修正されているため、これまでのアンケート結果と厳密には比較しがたい。よってここでは、今回の2014年度前期の結果から特徴的な点を取り上げる。

まず問1の「この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？」に関しては、「80%以上出席」が87.5%を占めていた。アンケートを実施した前期末に出席している学生の大多数は、授業におおむね参加しているといえる。

問2の「この授業の予習・復習にあてた1週間あたりの平均時間はどれくらいですか？」に関しては、「ほとんどなし」が54.7%を占めていた。半数以上が、予習・復習をしていないことになる。近年、教育活動に対する評価において自習時間の確保が重要な観点となっており、自習時間を増やすための働きかけを行っている教員もいる。しかし、全体として自習時間はまだ十分に確保されているとはいえない現状がある。

シラバスについての問5「授業内容、学習方法などのシラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？」に対して「そう思う」の割合は53.9%、問6「授業はシラバスに沿って展開されましたか？」に対して「そう思う」の割合は64.5%であった。過半数の学生にはシラバスが役立ったとみなされ、シラバスどおりに授業が展開されていると評価されている。現在、教務委員会を中心にシラバスへの記載情報を充実化させていく計画があるが、このような改変に伴い学生の評価が上がるかについても確認していくことが求められる。

以下より、2014年度前期の授業改善アンケートの結果の詳細を示す。

### 1. 全体集計

### 2. 学系別集計

※・自由回答項目については除かれ、選択式の設問について集計されている。

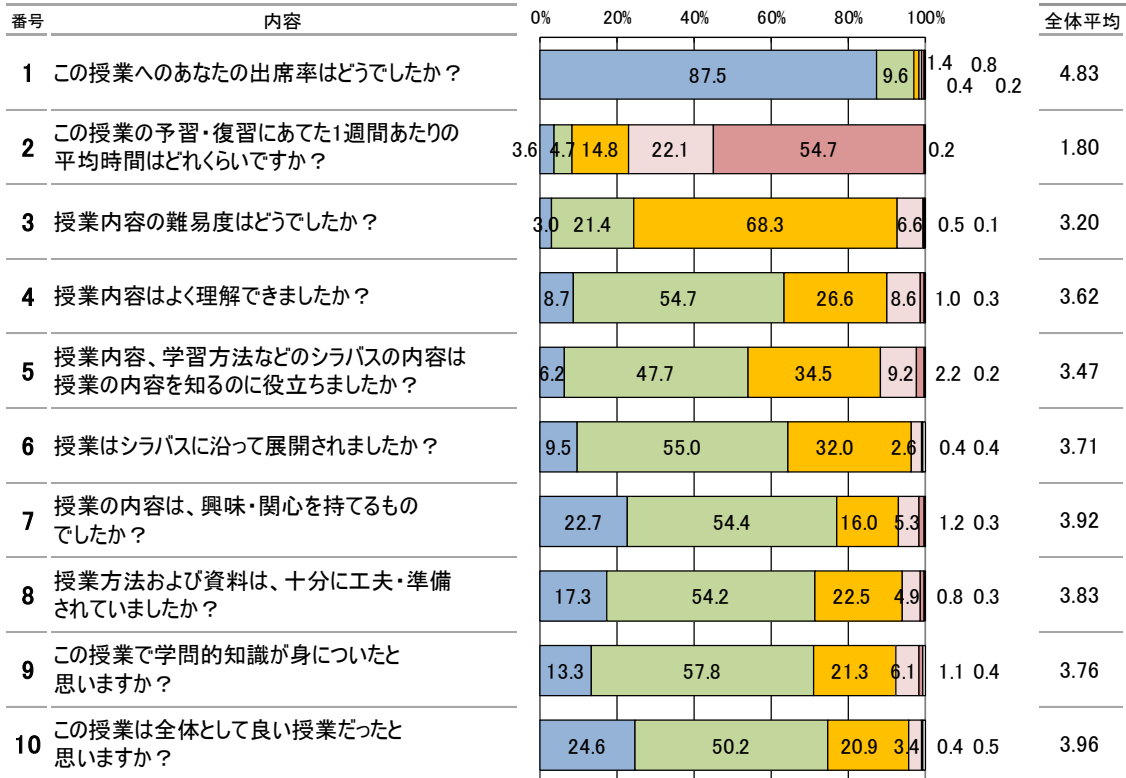
・学系別集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。

・豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目は、行動・社会・教育・グローバル系科目に割り振られている。

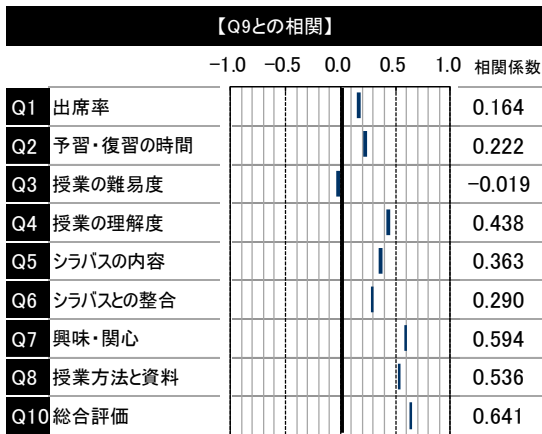
・学系の共通科目は、学系別集計に含めていない。

・各学系によって1科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。

<h1>全体集計</h1>	履修者数	2879
	回答数	2019
	回答率	70.1%

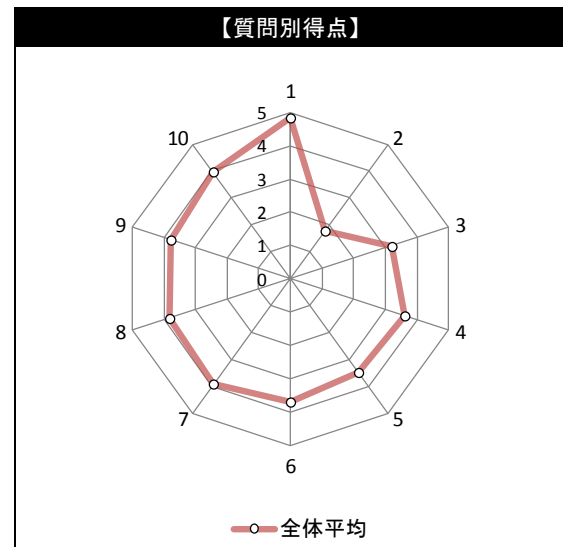
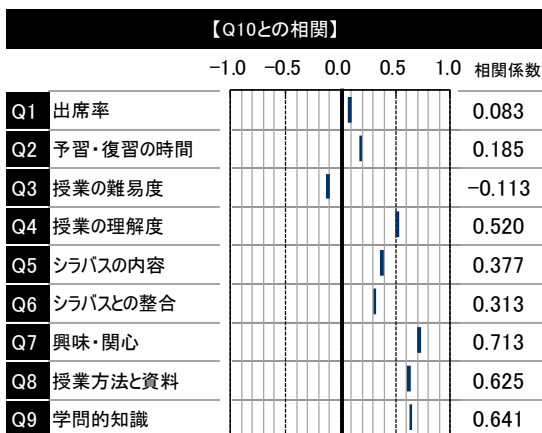


グラフ内数字は回答率(%)



回答凡例	5	4	3	2	1	-
配点	5	4	3	2	1	-
質問1	80%以上	40~60%	20~40%	20%以下	ほとんどなし	不明 (無回答を含む)
質問2	3時間以上	1.5時間~3時間	30分~1.5時間	30分未満	ほとんどなし	
質問3	難しすぎる	やや難しい	適切	やや易しい	易しすぎる	
質問4~9	強く思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全く思わない	
質問10	非常に良かった	まあ良かった	普通	あまり良くなかった	かなり良くなかった	

相関係数は±1に近いほど関係が強く、0に近いほど弱いことを意味します。プラスは正の相関関係、マイナスは負の相関関係です。総合評価であるQ9とQ10はどの項目と関係が深いのか、授業の何を改善すればよいのかの参考値として下さい。相関係数の「-」は計算不能を示します。(例：回答者全員が同じ回答、回答データが1件のみなど)

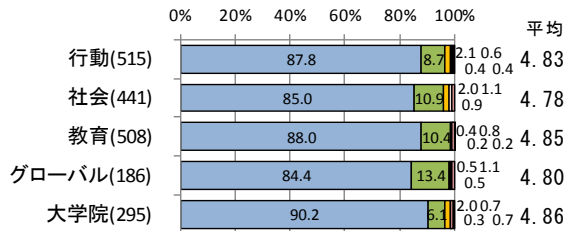


## 学系別集計

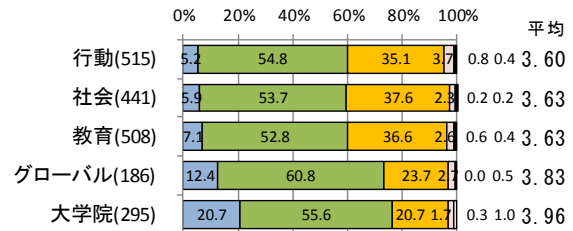
※グラフ内数字は回答率 (%)

回答凡例	5	4	3	2	1	-
配点	5	4	3	2	1	-
質問1	80%以上	40~60%	20~40%	20%以下	ほとんどなし	
質問2	3時間以上	1.5時間~3時間	30分~1.5時間	30分未満	ほとんどなし	
質問3	難しすぎる	やや難しい	適切	やや易しい	易しすぎる	不明 (無回答を含む)
質問4~9	強く そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全く 思わない	
質問10	非常に 良かった	まあ 良かった	普通	あまり 良くなかった	かなり 良くなかった	

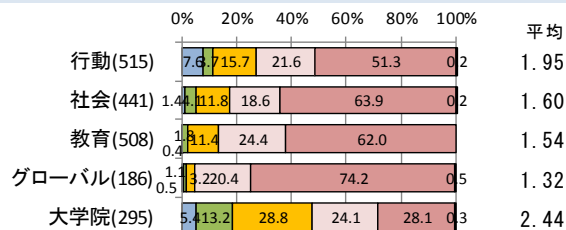
### 1. この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？



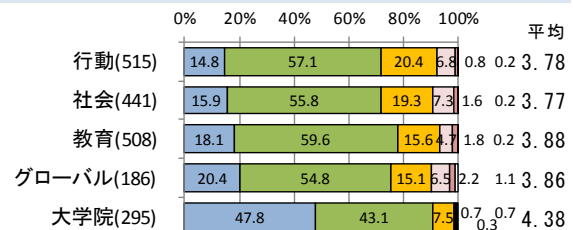
### 6. 授業はシラバスに沿って展開されましたか？



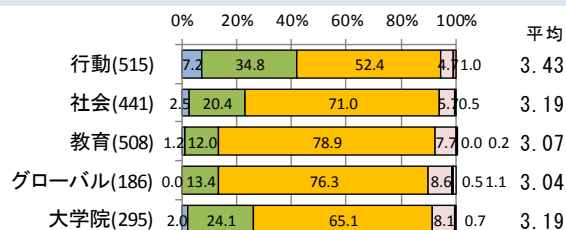
### 2. この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれくらいですか？



### 7. 授業の内容は、興味・関心を持てるものでしたか？



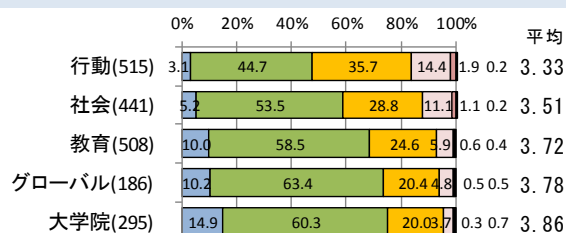
### 3. 授業内容の難易度はどうでしたか？



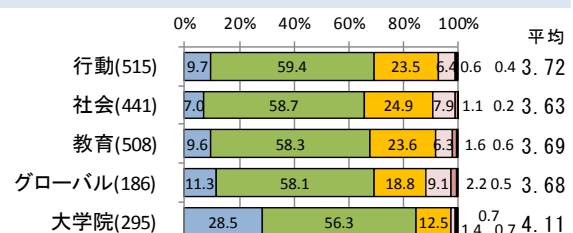
### 8. 授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていきましたか？



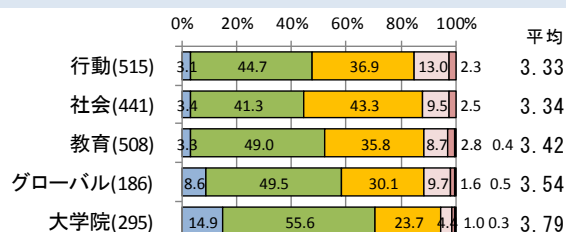
### 4. 授業内容はよく理解できましたか？



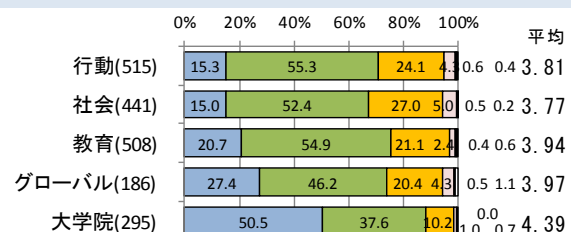
### 9. この授業で学問的知識が身についたと思いますか？



### 5. 授業内容、学習方法などのシラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



### 10. この授業は全体として良い授業だったと思いますか？



<満足度上位の科目>

問 10 より、満足度の結果を示す（有効回答数が 10 以上の科目のみ）。平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味する。アンケート対象科目 117 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 55 科目であり、平均値 4.0 を上回ったのは 34 科目であった。

2014 年度前期講義科目  
満足度上位の科目一覧

		有効回答数	問 10 平均値
1	比較行動学特講 I	12	4.92
2	多文化医療通訳概論	19	4.79
3	医療通訳論 I	13	4.77
4	紛争復興開発論 I	12	4.75
5	人格心理学特講	14	4.71
6	社会学説史特講	12	4.67
7	超域地域論 I	11	4.64
8	教育文化学特講	19	4.63
9	比較福祉論 II	15	4.60
	国際協力学特講 I	10	4.60
10	社会科・地理歴史科教育法B	13	4.54
11	発達臨床心理学	16	4.50
12	教育工学 II	25	4.48
13	社会保障政策論 II	23	4.43
	文化社会学特講	14	4.43
14	教育心理学 II	26	4.42
15	比較社会学特講	16	4.38
16	学校社会学	38	4.37
17	比較行動学	24	4.33
	教育人間学 II	12	4.33
18	動態地域論 I	16	4.31
19	国際社会開発論 I	22	4.27
	社会心理学	11	4.27
20	比較社会学	18	4.22

### 3. 担当教員からのコメント

以下は、授業改善アンケート対象科目について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載。非常勤講師は除く）。

<b>赤井 誠生</b>
<b>情報処理心理学・基礎心理学特講Ⅰ</b>
全体に好評価で安心しましたが、声が小さいという指摘を受けましたので改善したいと思います。

<b>足立 浩平</b>
<b>心理統計法</b>
本年は、難しい理論書を教科書として、使いましたので、その内容がほとんど理解できなくても気にする必要はありません。統計学の基礎となるフレームワークのフレーバーが体感できれば、十分であると考えられます。

<b>石井 正子</b>
<b>紛争復興開発論Ⅰ・紛争復興開発論特講Ⅰ</b>
今年、南スーダンの紛争に関するワークショップを開発するなどして、参加型授業の実施方法の改善を試みた。しかし、それゆえに、段取りがスムーズでなかったり、時間が足りなかったりという課題も浮かび上がったので、来年度以降の参考にしたい。 大学院と学部の合同の授業であるので、学問的な知識の提供や難易度に関しては、調整が難しいが、「Q9学問的知識が身に付いたか」のアンケート質問項目に対して、学部の学生の多数が「強そう思う」ではなく、「そう思う」であったため、さらに工夫が必要であると感じた。

<b>井村 修</b>
<b>臨床心理学Ⅱ</b>
おおむね標準的な評価だということがわかりました。授業の予習・復習にあてた時間は、2.34と全体の平均の1.80よりは高かったのですが、まだまだ改善の余地があるのかと思いました。もう少しホームワークを取り入れるなどの工夫をしてみたいと思っています。またシラバスと授業内容の整合性も課題が残っているようです。グループワークやグループでのプレゼンも行う授業なので、受講者数や関心のあるテーマなどの関連で、シラバスの記載された通りにすすめられないのが現状です。

<b>上田 博司</b>
<b>人間科学特殊講義Ⅲ（シニア・ビジネス）</b>
履修者は少人数ではあったが、学生と授業のなかで双方向による討議や話のできたので、満足している。授業の内容は全体的には学生らの満足のいくものであったが、最初の授業で学生らの希望をもっと聞いて、後の授業で更なる調整が可能か検討したい。



**岡田 千あき**

**国際社会開発論 I・国際社会開発論特講 I**

例年より内容の理解度が高かったようでほっとしています。  
一方で、予習、復習の時間がほとんどなかったようですので、来年度以降は、具体的な課題を出すことを検討したいと思います。  
外部講師の講演や視聴覚教材の活用など、工夫している点が好評だったのでとても嬉しく思っています。他学部、他研究科、他系の学生の受講も多かったですが、これを機に興味や関心をもってくれることを期待しています。

**岡部 美香**

**教育哲学・教育哲学特講**

本学に赴任して初めての授業でした。学生の力量や反応がまったく予測できず、教員・学生とも手探りで授業内容や授業方法をそのつど調整しながら行いました。このように不慣れな状態にもかかわらず、楽しんでくれる学生が残ってくれました。  
人数がいつも 10 名前後でしたので、講義ですが、学生が一方的に聴くのではなく、聴いたこと・読んだことについて思考する・議論するという機会をできる限り設けました。上記のように、それを楽しんでくれる学生がいる一方で、それが面倒だ、辛い、という学生もいました。後者の学生への対応が今後の課題です。

**小野田 正利**

**学校経営学特講**

履修者数は 12 名となっているが、実際には 3 名は最初から受講しなかったため 9 名。そのうち 6 名が回答してくれているので、75%の回答率となる。  
10 番目の設問「全体として良い授業だった」に高い評価があったのは、授業実施者としては満足している。もっとも、ワークショップ形式を 15 回の講義の中で、何回か組み入れる場合は、どうしても常に受講者が 15 人以上は欲しいところであるが、この 2 年間ぐらいは 1 ケタ台なのが残念なところである。

**川端 亮**

**計量社会学・計量社会学特講**

課題を多く出す形式で授業をしましたが、学部生で 6 割、大学院生で 7 割の受講生が 1 時間半以上の予習・復習を実行してくれており、計量分析の手法や考え方は十分に身についたと思います。ただ、課題や資料を CLE を使って配布しましたが、配布が遅いという指摘をいただきました。今後はできるだけ早くにアップするようにしたいと思います。

**木村 涼子**

**ジェンダー教育学・ジェンダー教育学特講(A)**

教員と受講生、また受講生相互の交流をはかるために、講義だけではなく、コメントシートを用

いた感想・質疑応答の時間、さらに受講生によるテーマ発表の時間も組み込んだ形式をとりましたが、その点は受講生同士の刺激にもなり、おおむね好評であることがわかりました。反省点としては、シラバスの予定どおりにすすまない回もあったこと、遅刻者の扱いについて受講生の不満があったことなどであり、来年度には改善をはかりたいと思います。

#### **熊倉 博雄**

##### **行動形態学**

講義中にも説明しているように、生物系科目が少なすぎる状況を補うために、内容量は多く、難易度は気にしないようにしているので、「難しい」と感じる受講生が多いのはやむを得ないと思います。

「ノートが取りきれない」「展開が早くて配布資料と説明との対応が取りづらい」という点については、今後なんらかの工夫を施して対処します。

##### **生物人類学特講Ⅰ**

シラバスとの対応がとれていない点については、講義中にも説明している通り、受講生の興味を反映するようにしていることから、やむを得ないと考えています。

#### **権藤 恭之・石松 一真**

##### **心理学実験**

本科目は、心理学実験に関わる5つの課題に対してそれぞれのレポートの提出を義務としている。レポートの提出を負担と感じている学生が少なからず存在する。しかし、レポートは、その後の科学論文としての卒業論文の執筆の初めの第一歩と言えるので、最後まで頑張っついてきてほしい。

提出されたレポートは、担当の教員およびTAにより丁寧に添削をされており、指導に従って修正すれば、最低限の体裁は整える合格点に達することが可能であるように組み立てている。しかし、中には独自に文献を調べ、基礎的な実験ではあるが、結果に対してユニークな考察を行う受講者もいるので、基礎実験であっても新しい発見をすることは可能である。好奇心を持って課題に取り組んでもらいたい。

#### **齊藤 弥生**

##### **人間科学概論Ⅱ(人間と社会)**

本講義は社会系の教員が交代で講義を行うオムニバス形式で行っており、毎年200人近くの受講生がある。講義では履修者の出席確認と理解度を確認するためにポートフォリオシートを使用しているが、講義の終了間際に入室し、講義を聞かずにポートフォリオシートに出席を記入するだけの学生が数名確認された。学生のアンケートにも、このような学生を取り締まらないことに対する批判する意見があり、来年度は対応策を検討する必要がある。

オムニバス形式の講義については「社会系で扱うテーマを全体的に知ることができてよかった」という意見と、「(それゆえに)内容が浅い」という意見の両方があった。また講義内容が難しいという意見もあり、講義の順番に工夫を加えることで改善できるように思われる。

<b>佐々木 淳</b>
<b>臨床教育学概論</b>
授業内容への興味や理解度、全体的な評価が高いことが確認できました。授業方法や内容の統一感などについていくつかの提案をいただきましたので、来年度の授業作成への参考とさせていただきます。

<b>佐藤 眞一</b>
<b>高齢者行動論・臨床死生学・老年行動学特講 I</b>
3名の教員によるオムニバスの講義であった。教員3名は、事前に内容が重ならないように打ち合わせて授業を行ったので、広範な内容になったかと思う。しかし、難易度、理解度などはおおよそ問題が無く、おおむね好評であったと思う。ただし、1、2名の学生が全体的に否定的な回答を寄せていたが、これらの学生からのコメントがないので理由が分からない。もしかしたら他学部の学生かもしれない。心理学的な内容は、基礎教育を受けていない学生には分かりにくかったり、関心が持てなかったりすることもよくある。参考図書を提示したものの、予習・復習の時間が少なかったため、今後は、課題提出などの工夫が必要かもしれない。

<b>志水 宏吉</b>
<b>学校社会学</b>
今期は40人程度の参加で、比較的まとまりのある授業ができたと思う。受講生同士のグループ・ディスカッションを重視した授業展開を心掛けた。来期も同様のスタイルで臨みたいと考えている。
<b>教育文化学特講</b>
社会学的なフィールドワークの方法について、テキスト講読といくつかの実習を実施することによって理解を深めた。受講生は20名を超え、活気のある授業展開が実現できたと思う。特に受講生たちの実習に対する関心・意欲は高く、聞き取り・観察等の課題に対する達成水準もきわめて高いものであった。

<b>Schwentker Wolfgang</b>
<b>比較思想史・比較思想史特講</b>
今後、特に授業の予習・復習となる課題を出していきたいと思います。

<b>鈴木広和</b>
<b>地域研究概論</b>
出席・遅刻の取り扱いが厳しいという意見がいくつかありました。この点についてはこの授業に関わる教員の間で検討します。
他の概論との重複部分がなくなるよう、教員間で連絡をとるようにします。
<b>動態地域論 I</b>
受講生がより授業に積極的に参加できるよう、受講生のグループワークなどを取り込むことを検討中です。また受講生が互いの考えを、もっと知ることができるようにする予定です。

<b>千葉 泉</b>
<b>多文化共生社会論・多文化共生社会論特講 II</b>
<p>受講生が、自らのライフ・ヒストリーを語り合うことにより、多文化共生の意義を学ぶという目的は、おおむね達成できたと思う。ただ、少数ではあるが、「自分のこれまでの歩み」や「現在の自分のあり方」について、十分に率直に語るができなかった受講生もいたという点で課題が残った。来年度は、受講生たちが、より躊躇なく自らを語るができるように、授業の進め方や教室の雰囲気作りという点で、さらに努力したいと考える。</p>
<b>中澤 涉</b>
<b>教育社会学・教育社会学特講</b>
<p>試験が難しく、持ち込みを認めてほしいという回答が複数あったのだが、これは学習時間が例年あまりに少ないため、日ごろ少しでも学習してほしいという思いがあって、持ち込み不可にしている。したがってこの方針は来年度も変更するつもりはない。今回は毎時間、簡単な小テストを課し、それで普段の学習時間を増やそうと試みたが、残念ながらあまり効果があったようには見えない。</p> <p>もっとも、授業内容が若干多すぎて、整理がつかない、という声もわからなくはない。授業内容はもう少し精選してもいいのかもしれない。また小テストの内容を、学期末試験に取り入れるなど（今回は一切そのようなことはしなかった）すると、多少学習や出席のインセンティブが高まるかもしれない。</p> <p>パワーポイントの資料の字が少し小さいという声もあった。この点は昨年も指摘され改善したが、まだ1枚あたりの情報量が多すぎるのかもしれない。これについては改善につとめたい。</p>
<b>中村 安秀</b>
<b>医療通訳論 I・医療通訳論 II</b>
<p>集中講義でしたが、今年はとくに、受講生の方の能力と意欲がすばらしいと感じました。米国で受けるなら高い受講料が必要となる講義です。文字通り医療通訳に集中した経験が、受講生の次へのステップになることを期待しています。</p>
<b>国際協力学 I・国際協力学特講 I</b>
<p>英語での講義で、当初はスケジュールが変更される中で、多くの学生・院生の皆さんが授業を続けて受講していただき、ありがとうございました。</p> <p>皆さんの発表の結果をみて、英語での発表の機会をもう少し増やしても大丈夫だと確信したので、来年度からは、英語の発表を増やしていきたいと考えています。</p>
<b>国際健康開発論特講</b>
<p>医学部、保健学科、人間科学研究科の学生・院生の皆さんに受講していただき、学際的な雰囲気の中かで授業ができました。</p>
<b>多文化医療通訳概論</b>
<p>多くの院生の皆さんに、授業をエンジョイしていただき、ありがとうございました。</p> <p>いろんな学部・研究科から参加していただき、学際的な雰囲気の中かで授業ができたことは、わたしにとってもありがたいことでした。</p>

**中山 康雄**

**認知システム論・認知システム論特講**

学部生の中からは、内容がむずかしいという声があった。しかし、今回での授業では、質問が多くあり、その点で授業がすすめやすい点があり、授業に積極的に参加した学生の人たちには感謝している。なお、試験の答案の中にはいつもどおり示唆に富む答案がいくつか見られた。授業の進めかたについての批判については、今後の参考にしていきたい。

**西森 年寿**

**教育工学Ⅱ・教育工学特講Ⅱ**

昨年度よりも得点が低くなった項目がいくつかあるようです。例えば「方法や資料の準備」は昨年度とそう変わらないはず（通常は漸次的に準備はよくなるはず）なので、紙調査への移行による回答者層の変化が影響しているのかもしれませんが。おかげで、課題がよりよく見えてきたように思います。

ワークの時間配分について足りない場合があるという意見をもらいました。個人差・グループ差があるので適切な時間設定は難しい課題ですが、TAとの連携で、より注意深く各グループの状況を確認するよう配慮したいと思います。

またゲストスピーカーへの評価もいただきました。選定などに配慮して充実させていきたいと思えます。

**人間科学概論Ⅲ(人間の形成)**

必修の概論ですので、専門科目との得点とは比較できない項目もあるかなと感じております。しかし一方で、入学してきた学生にとって入り口となる授業ですので、教育学系の魅力を十分に伝えられる内容を目指して、少しずつ改善していきたいと思えます。

**Robert Scott North**

**比較社会学・比較社会学特講**

アンケート結果は、学部生からも大学院生からも、ある程度の難しさの訴えがありながら、「アンフェア！」という意見は見受けられません。なので、これからも、改善点を考えながら、現状維持の授業を行ないたいと思えます。講義の言語が英語ですが、ノンネイティブが多いため、若干平易にしていますが、内容は、海外で行なっている同じような授業とほぼ同じです。読書の量は、ちょっと厳しいという声はあったが、本来なら、今の倍以上になります。「どこが大事かを指摘してほしい」というコメントに対して、「読ませている部分は全部大事」と返事したいです。資料をできるだけ絞った授業計画です。その代わり、評価の基準が厳しくないし、学生が自分にとっての大事だと思う部分に集中しても、試験にその知識を活かせるので、成績にそれほど大きな影響は与えません。

**野坂 祐子**

**教育心理学Ⅱ**

多くの学生が興味をもって受講していてよかったです。

授業ではできるだけグループワークを行い、受講者同士の意見交換の機会を設けるようにしました。お互いの意見から学べたことも多かったと思います。

より学びを多くするために、グループワークの指示を明確にするなど工夫したいと思います。予習や復習はぜひ自主的にやってほしいところですが、こちらでも課題を提示するなどして自己学習に取り組みやすいように改善していきます。

**Don Bysouth**

**人間科学特殊講義 I(Qualitative Research Methods)**

Given the small class size (and the limited feedback provided) it is difficult to provide any detailed feedback on the course. However, one important change to future course delivery (which I have implemented in the current semester for undergraduate students) is to reduce the assessment load. Students will now complete the thematic analysis assignment for 100% of the overall course grade, and will not be required to submit the discourse analysis assignment. I think this might alleviate some of the issues with course workload, which appear to be experienced by both undergraduate and graduate students.

**日野林 俊彦**

**比較発達心理学**

性に関わるテーマを様々な視点で取り上げたため、流れがわかりにくかったことを反省しています。また人数に比較して、教室が狭かったようなので、最初の段階で変更の可能性を確認すればよかったと思います。

**藤岡 淳子**

**人格心理学特講**

来年度は、スコアリングにもう少し時間をかけようと思います。

**藤川 信夫**

**教育人間学 II・教育人間学特講 I**

とくに、シラバスの書き方について、工夫が必要と感じた。

**三好 恵真子**

**人間開発学特講**

今年度の授業には、グローバル人間学以外にも、行動学、教育学、社会学の各系から多くの院生さんが受講してくださり、それぞれの専門性から示唆深い意見が寄せられ、教員側も学ぶことが多く、大変感謝しています。

本授業は人間開発学講座の教員によるオムニバス形式の授業であり、各回の授業における討論はもちろんのこと、最終回には総合討論を行ってきましたが、双方向型の授業をこれからも展開してゆきたいと思っています。

**人間環境論 II・人間環境論特講 II**

世界の諸地域における環境問題の事例や環境リスクに関する理論の講義を行っていますので、毎年事例を更新したり工夫を凝らしてきました。各回の授業の後のグループ討論やワークショップは、受講生の皆さんにとって刺激的であるようで、こうした形態は続けていこうと思います。場合によっては、学生さんたちの興味のある環境テーマを予め挙げてもらい、それについての授業を行うことも試みたいと思います。

**村上 靖彦****行為と倫理・行為と倫理特講**

授業の目的の説明が不十分なようでしたので、改善したいと思います。知識を伝達するのではなく、質的研究の方法を身につけていくことを目的としているため、データの扱いに慣れていない学生にもなじみやすいように、来年度は工夫してゆきたいともいます。

**安元 佐織****人間科学特殊講義 II(Quantative Research Methods)**

英語での授業だったので、授業中に行なわれるディスカッションも宿題も大変だったかと思いますが、受講してくれた学生さんが一生懸命取り組んでくれたおかげで、とても実りある授業になりました。今後、さらに多くの学生さんが受講してくれたらと思っています。

**八十島 安伸****学習生理学・行動生理学特講 I**

学習生理学・行動生理学特講 I に関しては、紹介した内容が多く、少し消化不良であったかのかかもしれません。大学院生には、概ね好評でしたが、多くの学部生には難解であったのかと思います。今後は、内容を絞り、さらに詳しく解説をしたいと思います。今年度から、講義中にできるだけ質問をし、周囲の受講生との討論を行わせ、それを発表してもらおうという時間をできるだけ毎回の講義中に行うようにしました。概ねこの方法は良かったと思いますが、受講生からの反応は良くなかったです。より主体的に学んで欲しいです。話の内容が分からないということも、理解のためには必要なステップであることをより認識してもらいたいです。何がどう分からないのか、何をどう考えればいいのか、それらをどう図式化・イメージ化し、さらに、言語化していけばいいのかということを伝えてきたはずですが、受講生にははっきりと受け止めてもらえなかったと思います。方法論の課題もあるかもしれません。今後はさらに主体的な講義参加を求める予定ですし、講義の方法についてもより工夫して行うために現在構想中です。また、考えることを求める講義であったのですが、受講生が 70 名超となったので、個々の受講生との対話が疎遠になったと思います。受講人数をできるだけ絞ることによって、相互対話の機会を増やすようにしたいと思います。

**人間科学概論 I(行動の科学)**

概論 I 「行動の科学」は、本年度より 11 名の教員によるオムニバス形式講義とグループワークを行う講義形式に変更して実施しました。この形式は概ね受講生からの高評価を得たと感じています。

特にグループワークに関しては、受身の講義だけではなく、他の学生の意見や考えを具体的に話し合いつつ、知り合える場となったようで概ね好評でした。熱心な議論を展開するグループが多く、多くの教員の予測に反してグループワークは成功したと思っています。ただ、グループワークの実施方法に関する点、また、講義の内容に関する点についての不満を持つ受講生が少数居ることも無視できないと感じています。それらの点に関しても、不満が解消できるような改善を考えていく予定です。たとえば、グループワークでは、議論のファシリテーターとしてTAを配置しましたが、今後、TAを増員することで、全てのグループでの討論や意見交換をより活性化できるのではないかと考えています。

#### **山田 一憲**

##### **比較行動学・比較行動学特講Ⅰ**

利他行動の進化について講義を行いました。私語はなく、よい環境で授業を進めることができました。期末試験では優れた回答が多く、授業内容を十分に理解してくれたと感じています。授業評価アンケートも、ポジティブな評価をもらいましたので、大きな問題はなかったと理解しています。

#### **山中 浩司**

##### **社会環境学概論**

例年オムニバス形式の授業についてはアンケートによる評価はそれほど高くない。これは教官が頻繁に入れ替わるために授業全体のイメージを構築するのが難しいこと、導入的な科目であるため個々のトピックについての踏み込んだ内容にならないことが一因と推測される。オムニバス形式の導入科目で、この点を改善するのは難しいが、今後は担当教官の連携を密にして、科目を履修する意味や履修の成果を学生側に理解してもらうように工夫していきたい。

##### **文化社会学・文化社会学特講**

大学院との合併授業のため、難易度の設定が難しく、後半の授業は学部生には少し難しかったかもしれない。アンケート結果についてはおおむね平均以上の評価をもらっているが、受講人数が多いため、受講生とのコミュニケーションがやや不足していたように感じる。来年度から、受講生の授業への参加を促す工夫を考えたい。